

<b>8-7</b>			
主題	地域の高齢者と子どもをつなぐ食育交流を目的とした コミュニティ・カフェの実践と課題		
副題	近隣大学と高齢者福祉施設が共同開催した「食育カフェ」で学んだこと		
キーワード1	食育カフェ	キーワード2	高齢者と子ども
		研究(実践)期間	24ヶ月

法人名	社会福祉法人 東京栄和会		
事業所名	千代田区立一番町特別養護老人ホーム		
発表者(職種)	小林雪子(管理栄養士)		
共同研究(実践)者	富永暁子(大妻女子大学短期大学部准教授)		

電話	03-3265-6131	FAX	03-3265-6136
----	--------------	-----	--------------

今回発表の事業所やサービスの紹介	社会福祉法人東京栄和会を母体とし平成7年5月に開設。「人としての思いやりの心の介護の実践」を理念とし、特養82床・ショート8床・デイサービス・地域包括センター・居宅介護事業所を千代田区より運営委託されている。また区民プール・ホール・レストランのある総合福祉施設として多くの区民が来館される。
------------------	---

**《1. 研究(実践)前の状況と課題》**

特養入所者・デイサービス利用者の余暇活動として平成20年より介護士と栄養士が共同で月1回「おやつ作り」を実施してきた。この活動に実習生やボランティアなどの学生が参加することで、普段以上に高齢者の表情が豊かになり、活動も活気が出ると感じていた。また、近隣の大妻女子大学の学生ボランティアによる食育講座を受講する高齢者もまたいきいきとした姿が印象的だった。

施設の特徴である複合施設としての役割である「世代間交流」について考えたとき、これらおやつ作りや食育交流の経験を活かし、地域の高齢者と子どもが交流する場を提供し、地域の方々の健やかな生活をサポートできないかと検討していた。同時期に大妻女子大学より「地域の方々が精神的にやすらげ、地域の文化が伝えられるようなプログラム開発」の提案を受け、共同して実践することとなった。

**《2. 研究(実践)の目的ならびに仮説》**

高齢者と子どもの食育交流を目的としたコミュニティ・カフェ「食育カフェ」を実施し、以下について検討した。

- ① 地域の人々に精神的な安らぎの場となる事の有効性
- ② 高齢者から子どもへ地域の文化が伝えられる場としての有効性
- ③ 食育カフェが継続的に運営できるような仕組みづくり
- ④ 地域内ボランティアによる住民参加型カフェの可能性

**《3. 具体的な取り組みの内容》**

本実践は平成26～27年について実施。今回は27年度分の報告とする。

1.食育カフェ実施状況

- ① 対象者：区内または近郊在住者
- ② 場所：当施設ロビー、多目的ホール
- ③ 開催期間：平成27年5月～計9回

- ④ 運営スタッフ：管理栄養士 2-3 名、栄養士養成校女子短大生 4-6 名、施設スタッフ 2-3 名
  - ⑤ 内容：食環境マップ作り、食育クイズ、食育遊び（豆つかみ等）、食事相談コーナー、和菓子作りなど
  - ⑥ 費用：材料費一部有料（100～500 円）  
「平成 27 年度千代田学」助成金
2. 「食育カフェ」に関するアンケート調査
- ① 対象：近隣保育園保護者、当施設利用者
  - ② 調査項目：カフェ利用に関して 18 項目
  - ③ 調査期間：平成 27 年 1 2 月
  - ④ 調査方法：自記式調査を用い、郵送で回収

#### 《4. 取り組みの結果》

1. 食育カフェについて
- ① 参加状況：参加者は延べ 9 回で 400 名を超え、そのうちの 9 割以上が区内在住であった。2 回目以降は地域のボランティアの方が 1 名～数名参加して下さった。
  - ② 内容：「食環境マップ」は美味しい飲食店の情報交換で話題が盛り上がった。「食育遊び」の豆つかみはみなさん真剣にとりくみ豆に関する会話が自然にでてきた。「和菓子作り」和菓子教室を主宰している方のボランティアの申し出があり、丁寧にご指導いただいた。
  - ③ 参加者の感想：なかなかできない機会を体験できた。楽しかった。今度はお団子が作りたいなど。
  - ④ スタッフの感想：前回参加した人から「次はいつやるのですか？」「また来ます」と言われてうれしかった。（学生）
2. 「食育カフェ」アンケート結果  
回答者 84 名（回収率 42%）  
食育交流を目的とした「食育カフェ」が区内にあるとよいと回答するものは過半数 81.0%。高齢者から子どもへ地域の安らぎの場となる可能性がある 81.4%。高齢者から子どもへ地域の文化が伝わる場となる可能性がある 81.4%で、カフェの継続運営を希望

すると回答した人は 83.3%であった。

#### 《5. 考察、まとめ》

食育交流を目的としたコミュニティ・カフェは区民にとって精神的な安らぎの場となり、高齢者から子どもへ地域の文化が伝えられる場として有効であることがわかった。和菓子作りなど自分の特技を生かし、ボランティアに参加して下さる方もおり、少しずつ住民参加型カフェになってきている。今後は、ボランティアにお手伝い頂く内容の具体化、マニュアルを作成し継続を計りたい。

#### 《6. 倫理的配慮に関する事項》

本実践発表を行うにあたり、第三者により対象者が不利益を被ることがないと判断を受け、参加者には口頭、アンケート郵送者には書面にて、本発表以外では使用しないことを説明し、回答をもって同意を得たこととした。

#### 《7. 参考文献》

- 1) 山納 洋 (2007) 「人と人が出会う場の作り方コモンカフェ」西日本出版社
- 2) 陣内雄次、萩野夏子、田村大作 (2007) 「コミュニティ・カフェと市民育ち—あなたにもできる地域の縁側づくり」萌文社
- 3) 武地一 (2015) 「認知症カフェハンドブック」株式会社クリエイツかもがわ

#### 《8. 提案と発信》

施設内でのおやつ作りという小さな活動を試行錯誤しながら継続したことが今回の活動につながったと実感している。今後も近隣の方々との和を広め、地域のニーズにあった活動に取り組んでいきたい。具体的には現在施設で行っている「認知症カフェ」と共同実施する案も上がっている。また、多くのボランティアの方に参加していただくためには具体的な内容やシステムを構築していくことが重要であることを学んだ。